

フランス語語順構造シフトの過程に見られる一般言語学的特徴

— 節内基本語順の各構成要素 (S/V/O) 間にはたらく言語作用について — *)

Caractéristiques de linguistique générale

relevées lors du changement structural de l'ordre des mots en français

— Sur les influences linguistiques mutuelles

au sein de l'ordre fondamental de proposition (S/V/O) —

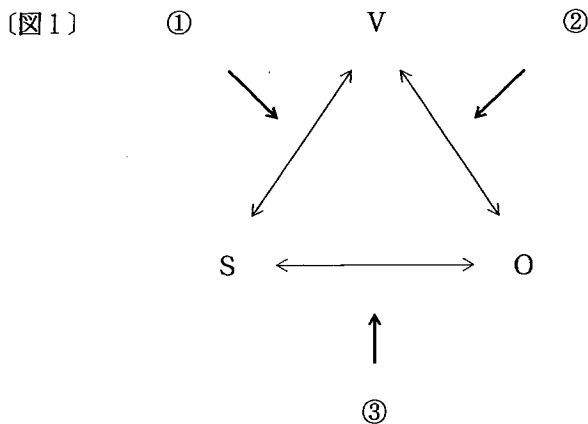
今田良信

IMADA Yoshinobu

0. はじめに

これまで筆者は、拙論(2009), (2010a), (2010b), (2012a), (2012b), (2013b)という一連の論考を通じて、フランス語における — すなわち、古フランス語から現代フランス語に至る — 語順構造シフトの通時的方向性とその背後で働いていたと考えられるメカニズムについて検討し、いくつかの点を明らかにしてきた。

そこで今回は、これまでの考察を踏まえ、さらに少し視野を広げ、全体を俯瞰して、上記の語順構造シフトの過程で、節内基本語順の構成要素であるS (主語) / V (動詞) / O (目的語) の各要素間 — すなわちS/V間, V/O間, S/O間 — に、一般言語学的観点からどのような言語作用が働いていたと考えられるのかを、3つの要素間それぞれに分けて整理し、まとめて置きたい。この考察は、拙論(2013a)で一度行っているが、それを再考し、部分的に修正を加えたものである。



なお、ここで言う「言語作用」とは、ある一定の方向性とか傾向性を持った一般言語学的あるいは言語普遍的な「力」ないし「影響力」を指す。〔図1〕に示したように、①～③で表した太い矢印がそれぞれの要素間に働いた言語作用を表わすことにする。

そこで、拙論から明らかになった、S/V間とV/O間の語順構造シフトの通時的方向性、およびS/O間については語順類型論的ないし言語普遍的傾向と、3つの間それぞれに働いていたと考えられる言語作用を順に考えてみたい。

1. S/V間の語順構造シフトと言語作用

この点については、拙論(2013b)を中心として、(2010a)、(2010b)、(2012b)などで扱った。すなわち、平叙文と疑問文を併せた語順構造の中にはS/V間の語順構造シフトに見られる通時的方向性があり、それは緩やかにVS優勢からSV優勢へとシフトしているのであるが、大きく2つに分けて言えば、平叙文ではSV・VSからSVへの語順項目の一本化(収斂)によって、一方、疑問文ではVSからVS・SVへの語順項目の分化によって、VSとSV両者間の語順項目総数のバランスを保とうとするメカニズムが働いているように見えるというものである。この現象が、結果として、古フランス語の特徴である「動詞第2位」から現代フランス語の特徴である「SVの定置化」への語順環境の変換をもたらすことにもなった。少なくとも、SとVの間に、(平叙文での)一本化と(疑問文での)分化という反対方向に働く言語作用が同時並行的に起こっていたことになる。

Frei(1929), p.41によれば、このような現象について言語的「欲求(besoin)」というものによって、説明がなされている。

“Tout système de valeurs suppose un ensemble d’oppositions formées d’identités partielles et différences partielles. Les deux besoins opposés, mais solidaires, qui tendent en partie à assimiler les éléments les uns aux autres et en partie à les différencier, sont à la base de tout système de signes.”

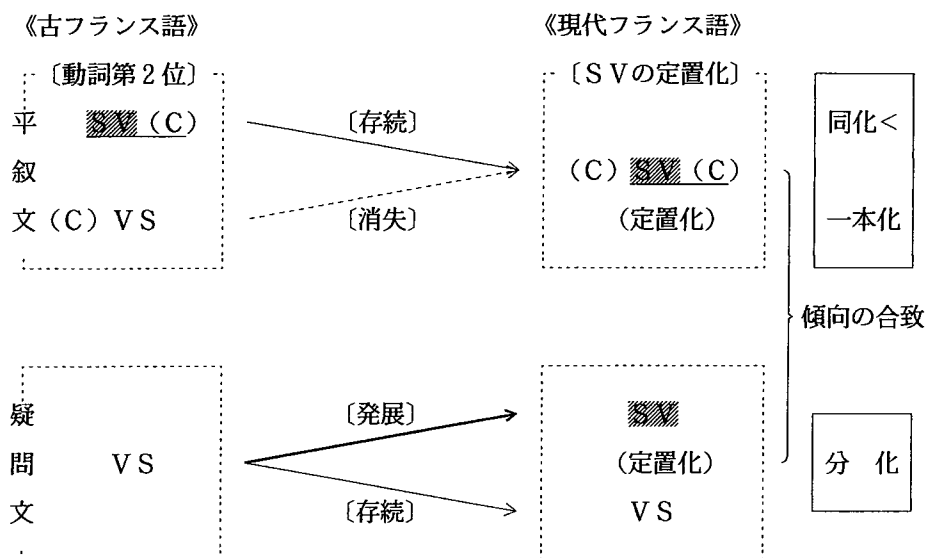
「価値体系はすべて、部分的同一および部分的差異からなる対立の総体を予想する。すべての記号体系の根底には、いくぶんは要素をたがいに同化せしめ、いくぶんはそれらを分化せしめるところの、対立的な・しかし連帯的な二つの欲求がある。」〔小林英夫訳、下線部筆者、以下同様〕

筆者の言う「一本化」とは、上述のように、古フランス語の平叙文における「動詞第2位」の語順環境において、SVという語順項目とVSという語順項目が共存していたものが、VSの方は殆ど消失してしまい、SVの方だけが現代フランス語まで存続して来ていることを指している。これは広い意味での「同化」の一種と見て差し支えないものであり、

Freiの言う「要素」を「語順項目」に置き換えれば、フランス語の平叙文と疑問文を併せたS/V間のこの語順構造シフトの事例も、上述の「対立的な、しかし連帯的な」2つの — すなわち、「同化」と「分化」の — 「欲求」から発した、同時並行的な作用によって起こった1事例と見ることができよう。そして、その現象のメカニズムもFreiの指摘した枠組みの中で無理なく説明できるものと筆者は考える。

これを図示したものが〔図2〕である〔SVとVSにコントラストを付けるため、SVにのみ網掛けを施した。下線部は節内基本語順を示す。Cは補語(Complément)。¹¹⁾〕

〔図2〕



この図でもう一度確認すれば、S/V間の言語作用①については、「同化」(< 「一本化」) および「分化」という反対方向に向かう同時並行的な言語作用が働いていたということが出来る。「同化」(< 「一本化」) 作用の方は、平叙文において、古フランス語の「動詞第2位」という語順環境のSVC・CVSに由来するSV・VSという2つの語順項目に影響を及ぼし、VS1つへと収斂させ、「分化」作用の方は、疑問文において、影響を及ぼし、VS1つからVS・SVという2つの語順項目へ分かれる現象を生じさせたことになる。

2. V/O間の語順構造シフトと言語作用

この点は、拙論(2012a)を中心に扱ったもので、(2013b)でも触れた。すなわち、節内基

本語順におけるV/Oを含めた各主要語順パラメーター — 他に、具体的には、N(名詞)/A(形容詞), N/Rel(関係節), N/G(属格), Ap(接置詞)/Nが含まれる — における構成要素の相対的順序について、その通時的方向性は、古フランス語の時期までに既に過半数のパラメーター(すなわち、V/O, N/Rel, Ap/N)において、いわゆるH(ead: 主要部) - D(ependent: 従属部)型の順序が優勢であったが、古フランス語から現代フランス語に至る過程でも、元々はD-H型の順序であったそれ以外のパラメーター(すなわち、N/G, N/A)でも、全体として、このH-D型への大きな流れの方向性に合わせて変化しようとするメカニズムが働いているように見えるというものである。少なくとも、事実上の推移はそのようになっている。

個別的にもう少し詳しく言えば、V/Oの相対的順序については、ラテン語では節内基本語順がSOV語順なのでD-H型(OV語順)であったものが、古フランス語では既にSVO語順のH-D型(VO語順)となっている。また、N/Gの相対的順序については、最古フランス語の時期には実はまだD-H型(GN語順)であったものが、²⁾その後、古フランス語の時期の間にH-D型(NG語順)へと変化している。³⁾そして、N/Aの相対的順序については、古フランス語ではまだD-H型(AN語順)であったものが、現代語では、主要語順パラメーターの中では最も遅れて、H-D型(NA語順)になったとされている。ただし、その内実を具に見た場合については、拙論(2014), (2015), (2016)を参照されたい。⁴⁾そして、最終的に現代フランス語では、すべての主要語順パラメーターにおいて、揃ってH-D型の値が取られているのである。

Sapir(1982), p. 150および p. 155を見ると、このような現象を「定向変化(～駆流⁵⁾) (drift)」と呼んで、次のように説明している。

“Language moves down time in a current of its own making. It has a drift. ... The linguistic drift has direction. In other words, only those individual variations embody it or carry it which move in a certain direction, just as only certain wave movements in a bay outline the tide. The drift of a language is constituted by the unconscious selection on the part of its speakers of those individual variations that are cumulative in some special direction. This direction may be inferred, in the main, from the past history of the language.”

「言語は自ら造る潮流に乗って時間を下る。言語には「駆流」がある。〔中略〕言語の駆流は方向を持っている。いいかえれば、一定の方向に動く個人的変異のみがその駆流を具現し、またはそれを維持するのである。あたかもそれは入江の波の或る一定の動

きのみが、その潮流の輪郭を示すに似ている。言語の駆流は、ある特定の方向に累加する個人的変異を、その言語の話者の側で、無意識の裡に選択することによって定められる。この方向は概して、その言語の過去の歴史から推断できる。」〔泉井久之助訳〕

また、田中、他編(1988), p.178 には、'drift'について、

「言語を均衡のとれた形式へ向かわせる原動力. サピア (E. Sapir) の用語. 言語のもつ強力な生命が、言語を一定の類型(type)へ駆り立てるという意味で、泉井久之助は「駆流」と訳したが「定向変化」という訳語もある。」

と説明されている。また、フランス語では、これを、単に'tendance'「傾向」と訳しているが、Dubois et al.(1973), p.484では、

“Dans la variation linguistique, on constate parfois que, pour des raisons peut-être difficiles à éclaircir, les changements ont comme une orientation commune, sont comme régis par une loi générale qu'on ne peut toutefois formuler avec précision: on parle alors de *tendance linguistique* ;”

「言語の変異において、おそらく解明困難と思われる理由によって、諸変化が共通の方向をもつようであり、明確には表明できないものだが、ある一般法則に規制されているようだということが時々みられる。その場合に〈言語の傾向〉という言い方がされる。」

〔福井芳男、他訳〕

と述べられている。以上のような指摘を踏まえれば、この語順類型論的観点から見た各主要語順パラメーターの事例も、Sapirの言う「定向変化」という一般言語学的現象の典型的な1事例であり、そのメカニズムも Sapirの説明の枠組みの中で明確に理解できるものように思われる。

従って、このV/O間の言語作用②については、「定向変化」という一定方向に向かう大きな流れへと言語諸項目を動かす作用が働いていたということができよう。

3. S/O間の語順類型論的ないし言語普遍的傾向と言語作用

1. および2. で示したS/V間およびV/O間の語順構造シフトと言語作用については、筆者が、これまで拙論で明らかにして来た結果をもとに考察した。あと1つ残るものはS/O間に纏わる事象ということになるが、これについては、1. や2. の場合のようなフランス語に固有の、S/O間に見られる語順構造シフトであるとか、その通時的方向性という類いのものは、筆者の知る限り、少なくとも現在までのところ見当たらない。

ただし、S/O間については、語順類型論的ないし言語普遍的傾向の点からは考えてみることができるように思われる。古フランス語において、節内基本語順はSVOであり、

それは現代フランス語においても変わらない。S/Oに関しては、両者ともにSO語順を取る。従って、この事実のみから導き出すことのできる語順類型論上の普遍性であるとか傾向と言えるものは、Greenbergによる普遍性の第1番目⁶⁾ — と言っても、絶対的普遍性(absolute universal)ではなく、(強い)普遍的傾向((strong) universal tendency)としてであるが⁷⁾ — ということになろう。すなわち、

“Greenberg’s Universal 1: In declarative sentences with nominal subject and object, the dominant order is almost always one in which the subject precedes the object”

「グリーンバーグの普遍性1：名詞的な主語と目的語を有する平叙文において、支配的な配列順序は、ほとんど常に、主語が目的語に先行するものである」〔拙訳〕
というものである。これは語順類型論の最も大切なパラメーターである節内基本語順 — 文の構成要素S/V/Oの相対的順序 — の分布に関して見出されるものである。3つの構成要素からは、論理上可能な6つの型：SOV, SVO, VSO, VOS, OVS, OSVが得られるわけであるが、実際には、世界の諸言語におけるこれらの型の分布には著しい偏りがある。例えば、Tomlin(1986), p.22に示されたデータでは、⁸⁾最初の3つの型 — SOV, SVO, VSO [下線は筆者による] — だけで全体の96%を占めるとされているが、それらはいずれも、上述のGreenbergの普遍性に指摘されているように、SがOに先行するものばかりなのである。

その理由について、Comrie(1989²⁾), pp.20-21によれば、次のように述べられている。

“Explanations for the predominance of word orders where the subject precedes the object seem more likely to have a psychological basis, in terms of the salience of the agent in the agent-action-patient situation, and the high correlation between semantic agent and syntactic subject:”

「主語が目的語に先行する語順が支配的であることに対する説明は、むしろ、心理的な要因に求められるように思われる。すなわち、動作主から被動者へ動作が及ぶという状況における動作主の持つ顕著さ、そして意味的動作主と統語的主語との高い相関性という点から説明されるであろう。」〔松本克己・山本秀樹訳〕

このような普遍的傾向が存在する理由については、なお念入りの検討の余地があるかもしれないが、少なくとも、古フランス語から現代フランス語に至るS/O間についても、フランス語だけに限らない、SO語順の圧倒的優位性という人間言語全般に通じる力が働いていたと考えることは差し支えないと思われる。

従って、S/O間に働いている言語作用③としては、言語普遍的かフランス語固有かと

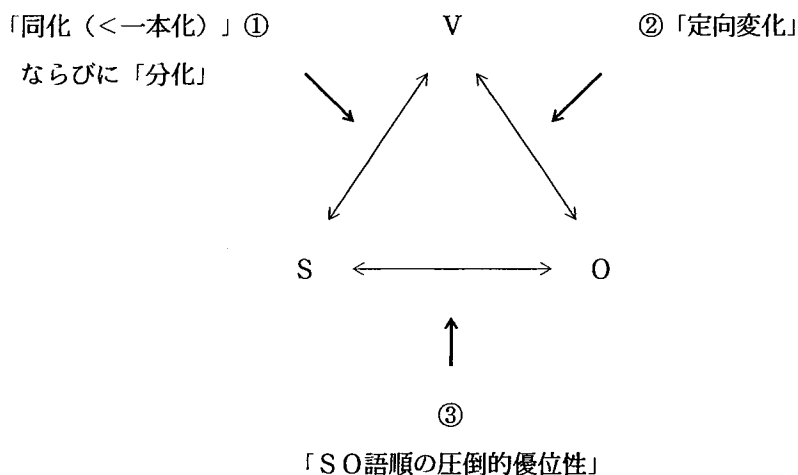
いう点で、言語作用①や②と同質的とは言えないが、語順類型論上の言語普遍的傾向である「SO語順の圧倒的優位性」という作用を挙げて置きたい。

さらに、S/O間のこの普遍的傾向という作用は、平叙文におけるCVS語順の消失を助長する影響を及ぼした可能性もある。すなわち、Wartburg(1971), pp.129-130によれば、13世紀末あたりまでに2格体系の区別が無くなったために、フランス語は語順の自由も失われねばならなくなり、14世紀以後には文中の位置がSとOを区別する唯一の方法となる。こうしてOVS(=CVS)構文は甚大な打撃を被ることになった。従って、SとOを区別するのは、もはや屈折ではなく統語法上の方法である語順となる。ただし、SとOを区別するのにこの方法がどうしても必要となるのは、文意に混乱が生ずる恐れのある場合だけであり、OVS語順が、文の理解に何の危険もない場合でも禁じられるようになるのは17世紀に入ってからにすぎないとのことであるが、この間、この言語作用の圧力がOVSを含めたCVS語順の消失にも影響を及ぼしたのではないかということである。

4. 結論と今後の課題

以上、1. から3. において述べたことを踏まえ、古フランス語から現代フランス語に至る語順構造シフトの過程において、0. で述べた節内基本語順の構成要素S/V/Oの各要素間それぞれに働いていたと考えられる一般言語学的な言語作用をまとめたものが、〔図3〕である。

〔図3〕



前節の最後に述べた事例のように、各要素間に働くとされた①～③の言語作用はそれぞれ

れ、当該要素間だけに影響を及ぼすのではなく、それ以外の要素間に働く作用とも有機的に連動して、その動向にも影響を及ぼし合う可能性を常に持っていると考えられる。その上で、別の要因なども複雑に絡み合い、重なり合って、全体として、言語体系内の様々な範疇や事象を構成する諸項目どうしの際に、言語構造シフトや一定の通時的方向性が生じてくるものと思われる。今回は、フランス語語順構造シフトのうち、節内基本語順の構成要素 S/V/O 各要素間に纏わる言語作用に的を絞って問題としたわけであるが、今後は、さらに別の言語範疇や言語現象にも射程を広げ、その仕組みを観察して行きたい。

注

- *) 本稿は、日本ロマンス語学会第54回大会（九州大学西新プラザ，2016年5月22日）における口頭発表をもとに、修正・加筆を施したものである。
- 1) 補語(*complément*)は、直接目的補語、間接目的補語、状況補語を含み、O (=直接目的補語)はCに含まれることになる。
 - 2) 例えば、*pro Deo amur*「神(へ)の愛に賭けて」(842: *Serments de Strasbourg*『ストラスブールの誓約書』)、*li Deo inimi*「神の敵ども」(881: *Séquence de sainte Eulalie*『聖女ユーラリの続誦』)〔事例のイタリック体は属格、以下同様〕。
 - 3) 例えば、*La mort Perceval*「ペルスヴァルの死」(1230: *La Mort le roi Artu*『アーサー王の死』)、*En nom Deu*「神の名において」(1225: *La Queste del saint Graal*『聖杯の探索』)。
 - 4) これについて具体的に言えば、限られた範囲での調査からではあるが、名詞(N)と付加形容詞(A)の出現頻度について、延べ用例総数(token)の観点から見れば、Aの前置例(AN):Aの後置例(NA)≒3:1の分布で、前置例が3倍強多いが、形容詞別異なり語数(type)の観点から見ると、AN:NA=1:1の分布で、差が無いという結果が出た。しかし、テキストの見掛け上では、typeの方の1:1は、tokenの方の3:1の影に隠れてAN語順が優勢に見えていることを明らかにしたものである。なお、そこから推定される内容などについて、詳しくは拙論を参照のこと。
 - 5) 「駆流」は泉井久之助の訳語。
 - 6) Whaley(1997), p. 83からの引用。
 - 7) Comrie(1989²), p. 92を参照。
 - 8) 同書によれば、総数402の言語を対象に行われた調査の結果、各語順型に含まれる言語数の実数(百分率)は、SOV: 180(45%), SVO: 168(42%), VSO: 37(9%), VOS: 12(3%), OVS: 5(1%), OSV: 0(-%)であり、S/Oの相対的順序に

ついてSO型とOS型に分けると、S/V/Oによる上位3つの型が何れもSO型で合計385(96%)、下位3つの型が何れもOS型で合計17(4%)となっている。

参考文献

- 今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」,『ニダバ』,38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」,『ニダバ』,39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b):「歴史言語類型論の視点から見たフランス語の疑問文」,『ロマンス語研究』,43, pp.21-30.
- 今田良信(2012a):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」,『ニダバ』,41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b):「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」,『ロマンス語研究』,45, pp.21-30.
- 今田良信(2013a):「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用」,『ニダバ』,42, pp.30-39.
- 今田良信(2013b):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの —」,『ロマンス語研究』,46, pp.77-86
- 今田良信(2014):「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順に関する考察 — 文法書記述の問題点,矛盾点に着目して —」,『ニダバ』,43, pp.21-30.
- 今田良信(2015):「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順について — 延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比による文法書記述の再検証 —」,『ロマンス語研究』,48, pp.1-10
- 今田良信(2016):「古フランス語における付加形容詞の位置と韻律上の特徴について」,『ロマンス語研究』,49, pp.61-70.
- 田中春美,他編(1988):『現代言語学辞典』,成美堂.
- 樋口勝彦・藤井昇(2000):『詳解ラテン文法』,研究社.
- Chaurand, J. (1987⁵): *Histoire de la langue française*, Paris: PUF.
- Combettes, B. (1988): *Recherches sur l'ordre des éléments de la phrase en moyen français*, Thèse pour le Doctorat d'Etat (Université de Nancy)
- Comrie, B. (1989²): *Language Universals and Linguistic Typology*, Oxford: Blackwell.
- [松本克己・山本秀樹訳(1992):『言語普遍性と言語類型論』,ひつじ書房]

- Dubois J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
 [福井芳男, 他編訳(1980): 『ラールス言語学用語辞典』, 大修館書店]
- Frei, H. (1929): *La grammaire des fautes: Introduction à la linguistique fonctionnelle*, Paris: Geuthner. [小林英夫訳(1973): 『誤用の文法』, みすず書房]
- Greenberg, J. H. (1966²): *Universals of language*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Lehmann, W. P. (1974): *Proto-Indo-European Syntax*, Austin: University of Texas Press.
- Marchello-Nizia, Ch. (1995): *L'évolution du français: Ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris: Armand Colin
- Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDBS.
- Sapir, E. (1982): *Language: An Introduction to the Study of Speech*, London: Granada.
 [泉井久之助訳(1987): 『言語—ことばの研究』, 紀伊國屋書店]
- Tomlin, R. S. (1986): *Basic Word Order: Functional Principles*, London: Croom Helm.
- Wartburg, W. von(1971): *Evoluton et structure de la langue française*, 2^e éd.,
 Berne: Francke. [田島宏・高塚洋太郎・小方厚彦・矢島猷三訳(1976): 『フランス語の進化と構造』白水社]
- Whaley, L. J. (1997): *Introduction to Typology: The Unity and Diversity of Language*, London: SAGE Publications. [大堀壽夫(2006): 『言語類型論入門 — 言語の普遍性と多様性 —』岩波書店]